

# ベトナム・フエ地域のオンタオ崇拜

鍋田尚子

## 要旨

ベトナム・キン族の各家庭では、毎年陰暦12月23日に、台所の神とされる「オンタオ」を祀る儀礼がおこなわれ、オンタオは現在でも家族を見守る最も重要な神として信仰されている。中国に由来する竈神が、女神1柱、男神2柱からなるオンタオとして広くベトナムで土着化する過程で、オンタオを祀る儀礼は地域ごとのバリエーションを生んできた。

本稿では、文献調査とベトナム各地での現地調査に基づき、まずフエ地域におけるオンタオを祀る現在の儀礼形式が、より古いベトナムのオンタオ儀礼の形式を継承し、かつ独自の変化を遂げて形成されたことを、他地域との比較から明らかにする。そのうえで、現在のフエ地域における人々のオンタオ崇拜の特徴を、歴史を視野に入れつつ明らかにする。さらにそこでは、オンタオがもつ両義性、すなわち、守護神である一方で災異神としても観念され祀られるようになるという状況についても指摘する。

キーワード：ベトナム・フエ地域、オンタオ、竈神、儀礼、両義性、災異神

## Worship of Ong Tao in Hue, Vietnam

Naoko NABETA

### Abstract

Ong Tao is a tutelary deity of the kitchen furnace in Vietnam. Ong Tao rituals are performed nationwide in Vietnam, as Ong Tao is one of the most important deities for the Kinh people of Vietnam. When the custom of worship of the tutelary deity of the kitchen furnace was introduced from China into Vietnam, the Kinh people created three deities to represent Ong Tao in Vietnam and the ways of worship, including ritual practices, diversified as they developed in different regions of Vietnam.

In this paper, I illustrate the characteristics of Ong Tao worship in Hue that are both a continuation of old traditional religious observance and newer forms unique to Hue, through a comparison with other regions of Vietnam by both literature study and field survey. The characteristics of Ong Tao in Hue are considered through the historical background and the concepts of Ong Tao among the contemporary people, including the ambiguous nature of the deity as both a "tutelary" and a "bringer of natural disasters".

## はじめに

ベトナム・キン族の家では、祖先の祭壇や台所で「オンタオ」(ông Táo) が祀られている。オンタオとは、いわゆる台所(竈)の神のことである。現在でもベトナムの人々にとってオンタオは家族の健康や幸せを守る最も重要な神であり、陰暦12月23日には全国各地の家庭で儀礼が行われる。また近年では、大晦日にオンタオを神官としてベトナム社会を風刺する喜劇が人気を博している。喜劇ではあるが、社会の風刺や批判が許されているのはオンタオのみであり、現代ベトナム社会におけるオンタオの存在意義が表れている。

オンタオは、正式名称を「タオクアン」(Táo quân) という。漢字表記では「灶君」となり、中国竈神の名称であることが分かる。ベトナムでは一般的に年配男性への尊称である「オン」(翁 ông) を付けて、「オンタオ」(翁灶) と呼ぶことが多い。筆者は本稿において、人々が親しみを込めて呼ぶオンタオという名称を使用することにする。このオンタオは、名称や役割、祭祀日などから中国竈神の影響を強く受けていることは明らかである。しかし、中国に由来する竈神は、女神1柱、男神2柱からなるベトナムのオンタオとして土着化し、その過程でオンタオを祀る儀礼は地域ごとのバリエーションを生んできた。なかでも、フエ地域のオンタオは、祭壇に小さな土製の神像を祀り、オンタオを天に送る送神儀礼では、神聖な木の下や廟などに古い神像を捨て新しい神像に更新するという、他地域にはみられない儀礼がおこなわれている。

ベトナムの各地域は、その形成過程や地理的環境の違いから、現在においても多くの慣習や祭祀方法に多様性がみられる。オンタオもまた、それぞれの地域の特徴を有しながら時代の流れとともに変化をしている。そのなかにおいて、フエ地域のオンタオはより古いベトナムのオンタオ儀礼の形式を継承し、かつフエ独自の変化をしていると考える。そこには、フエ地域のどのような社会的背景、人々のオンタオに対する観念があるのだろうか。

オンタオの研究は20世紀初頭に始まる。20世紀以前のオンタオに関する記述は、17世紀の宣教師や外国人商人による記録、18世紀は随筆集や各儀礼と祈禱文が掲載された資料、19世紀は地誌などからみることができる。しかし、これまでオンタオに関して、先行研究の整理による新しい論考の位置づけ作業、現地調査による時間や場所、状況等の明記、ベトナム全土の主要地域における比較検討などの本格的な研究はおこなわれていない。オンタオの初期の研究としては、漢文でベトナムの風俗を紹介したマイ・ヴィエン・ドアン・チエン (Mai Viên Đoàn Triên) の『安南風俗冊』(Mai Viên Đoàn Triên 2008 (1906))、ベトナム語で書かれた最初の研究ファン・ケー・ビン (Phan Kế Bình) による『ベトナムの風俗』(Việt Nam Phong Tục) (Phan Kế Bình 1915) がある。20世紀初頭の民間のオンタオ祭祀を知る重要な資料ではあるが、どちらも年中行事、特に「テト」(旧正月) との関わりのなかで僅かに述べられているのみである。トアン・アイン (Toan Ánh) は、オンタオについて役割、祭壇の配置、字牌の内容等を詳しく体系的に整理している (Toan Ánh 1997 (1967), 2000)。しかし、調査地域や時代、参考資料の明記がないため、時間と空間の混在したオンタオがベトナムのオンタオとして記されている。各地域のオンタオ研究としては、フエ地域ではチャン・ダイ・ヴィン (Trần Đại Vinh 1995) とフィン・ディン・ケット (Huỳnh Đình Kết 1998, 2001, 2005) の研究、南部ではフィン・ゴック・チャン (Huỳnh Ngọc Trảng 1993, 1994, 2013)、チャン・ゴック・テム (Tran Ngọc Them 1999 :138-140) の研究があり、地域の信仰や祭祀の実態について詳細な調査をおこなっている。しかし、オンタオに関しては前述した文献資料を参考にしているため、本来は

北部地域の特徴であるオンタオの名称や祭祀方法が中部や南部のオンタオのなかでも述べられている。

以上のように、これまでの研究では概して先行研究を精査し言及することなく、また研究者自身による現地調査に基づいた研究と分析も僅かである。そのため、地域によるオンタオ信仰や儀礼の実態を明らかにし、文献調査と現地調査から各地域のオンタオの特徴を整理した研究はない。台所形態の変化や社会・歴史との関わりに焦点をあてた研究もおこなわれていない。また、既存の研究結果の多くは、オンタオの性格や役割には深く言及しておらず、おおむね「一家の主」として家族を守護する、といったオンタオのプラス面のみを取り上げている。しかし、ベトナムの祈祷師が最も信奉する独脚神が、凶悪な面を備えているように（大西 2001:3-48）、実際のベトナムの民間信仰や崇拝対象は吉凶両義性を兼ね備えているものが多い。

先行研究における以上のような現状を踏まえ、本稿では、本格的な研究における個別の細かい調査により、各地域とフエ地域のオンタオ崇拝の特徴からオンタオの両義性という課題の実証を試みる。まず、オンタオの民間祭祀に関する文献調査と、台所形態やオンタオ儀礼を中心とした現地調査に基づき、北部・南部・中部地域及びフエ地域のオンタオの特徴を整理する。それをもとに、フエ地域におけるオンタオを祀る現在の儀礼形式が、より古いベトナムのオンタオ儀礼の形式を継承し、かつフエ地域独自の変化を遂げて形成されてきたことを明らかにする。そのうえで、現在のフエ地域における人々のオンタオ崇拝の特徴を、オンタオがもつ両義性、特に「災異神」としての側面から、歴史を視野に入れつつ考察する。なお、本論で用いる北部・中部・南部の表現は、ベトナムの行政区分に基づいたものである。必ずしも行政区分とオンタオの特徴が一致するわけではないが、文献資料との照合と基本的な地域の特徴を整理する意味もあり今回は行政の地域区分を用いる。

## 1. ベトナムのオンタオ

ベトナムで信仰されるオンタオとはどのようなものであるかをまず概観したい。

### (1) ベトナムの宗教・民間信仰

ベトナムの宗教・民間信仰のなかでどのようにオンタオが位置づけられるかをみていきたい。

中国の竈神は、現在『道蔵』に竈神の儀礼と竈王経が収められ<sup>1</sup>、道教事典にも竈神は道教神（桜庭 1994 :343）として位置づけられている<sup>2</sup>。ベトナムのオンタオについて大西和彦は、年末から年始にかけての民間信仰の儀礼のなかで、竈神という道教神の祭祀がおこなわれると記している（大西 2002:102-103）。中国の竈神を道教神として位置づければ、ベトナムのオンタオも経典や「定福灶君（東厨司命灶府神君）」の字牌を持つことから、道教神であると考えることが出来る。

筆者はしかし、オンタオを信仰する民間の人々を調査の対象としている。人々にとって、オンタオは特定の宗教神ではなく、家族を守る神である。そのため、筆者はオンタオを道教の神

<sup>1</sup> 『道蔵』「洞真部威儀類」に「東厨司命燈儀」、「洞玄部本文類」に「太上靈宝補謝竈王経」の記載がある。

<sup>2</sup> 竈神が道教神か民間信仰神か研究者により見解が異なる。澤田は竈神を民間信仰としている（澤田 1982:8-12）。

であるが、人々にとっては民間信仰の神であると考えられる。この立場は、三尾裕子の唱える「火山山脈」論<sup>3</sup>が説明している。筆者も道教を頂上として民間信仰を麓とする火山における頂上と麓との動態的關係（三尾 1999:223, 2005:213）という立場からオンタオをみていきたい。

## (2) ベトナムの年中行事

20世紀初期のベトナムの民間における年中行事を『安南風俗冊』から整理した（表1）。行事の内容には中国の影響がみられる。灶君朝天節と除夕節が原文では正月儀礼として記されている。灶君朝天節とはオンタオの送神儀礼日である。この日を境に人々の生活が本格的に正月行事へと切り替わる（大西 2002:96）。そのため、正月行事のひとつとして考えることができる。また『ベトナムの風俗』に記された年中行事もほぼ同じ内容であるが、送神儀礼は12月の行事として記されている。

表1 ベトナムの年中行事

1月	テト（ベトナム正月）元旦、2、3日 初4日：祖先を送る日 初7日：開賀節 十五日：上元節	6月	
		7月	15日 中元節：TẾT TRUNG NGUYỄN
		8月	15日 中秋節：TẾT TRUNG THU
2月		9月	(9日 重陽節：TRÙNG CỬU [重九])
3月	3日 寒食節：TẾT HẠN THỰC 寒食節、または清明節	10月	10日 重十節：TẾT TRÙNG THẬP
		11月	
4月		12月	臘月23日：灶君朝天節 臘月30日：除夕節 夜半：交承節 <sup>4</sup>
5月	5日 端陽節（端午節）：TẾT ĐOAN NGỌ		

Mai Viên Đoàn Triển 2008 (1906) をもとに筆者が表を作成、(9月は Phan Kế Bính 2011(1915):50-63)

## (3) 文献からみるオンタオの民間祭祀

オンタオの記述が文献上に初めて現れるのは、現時点で確認できる限りでは、1651年アレクサンドル・ド・ロード神父の『安南語・ポルトガル語・ラテン語辞典』である。この辞典には、「táo (灶) bếp」(カマド、台所)の項目があり、「táo coên, bua bếp, bếp, phâm cao,<sup>5</sup>」と説明されている (Alexandre De Rhodes 1651:723)。1659年に宣教師ベント・ティエン<sup>6</sup>の記した資料に「Bếp thi Táo quân, gọi là Vua bếp.」(竈にはタオクアン(竈君)、竈王と呼ばれる)(Đỗ Quang Chính 1972:176)とあり、オンタオの民間伝承が紹介されている。ここでは三人の登場人物と三人の死が語られ、現在のオンタオ民間伝承との関わりが伺える。しかし、オンタオ三神とは明記されていない。1681年にはタベルニエが、トンキン人は家で三つの神を祀る習慣

<sup>3</sup> チュルヒャーが中国宗教について記した、「中国の宗教状況をピラミッドに譬え、最も高いレベル(学識のある聖者達や正典と認められる経典のレベル)では、仏教と道教の頂点は別々にみえるが、麓(俗人の実践と信仰のレベル)ではそれらは分化していない宗教に溶け込んでおり、最も基礎の部分では二つのシステムは不可分の民間信仰と実践の塊に溶け込んでいる」という表現に同意し、頂上と麓の相互関係にも重要視し、成立道教と民間信仰とは、頂上と麓が相互に影響を与えながら双方の再編成が行われていると考える (三尾 1999:233)。

<sup>4</sup> 原文では臘月23日と30日の行事は1月の項に記載されている。便宜上表には12月の行事とした。

<sup>5</sup> táo coên, bua bếp, bếp, phâm caoの訳は、「灶君、カマド王、カマド、ファム・カオ」となる。大西は最後のファム・カオはオンタオの名前ではないかと記している (大西 2002:97, 2013:14)。

<sup>6</sup> ベント・ティエンの“LỊCH SỬ NƯỚC ANNAM (安南国の歴史)”はドー・クアン・チン (Đỗ Quang Chính) が現在のベトナム語(ベトナム国字)の形成過程を研究するために探し出した資料のひとつである。

があり、第1はタオクアン（竈君）、第2は先師、職業を助ける神、第3は、Buabin（オンディア翁地？<sup>7)</sup>、これは人々が家を建てるときに拝む神であると述べている（Tavernier, J.B. 2011 (1681) : 99)。ここには三つの神が記されている。

1700-1800年代については、民間のオンタオ祭祀に関する記述は、現時点では発見できていない。1906年に出された『安南風俗冊』には、陰暦12月23日オンタオ送神儀礼において、一匹の鯉を用いること、古い土製支脚<sup>8)</sup>を捨て新しいものに取り替えることが記されている（Mai Viên Đoàn Triển 2008 (1906)）。ファン・ケー・ビン<sup>9)</sup>は、1915年の『ベトナムの風俗』のなかで、オンタオ送神儀礼は人間の善悪を天に報告に行く道教的役割と、夫二人と妻一人の登場する民間伝承に従って祀られると説明し、民間伝承に登場する夫二人妻一人の三人がオンタオ三神になることを明記している（Phan Kế Bính 2011 (1915) : 62）。儀礼では鯉を用いることも記されている。また、元旦には供物を「土公（Thổ công）、灶君（Táo quân）、芸師（Nghệ sư）」に供えたとある（Phan Kế Bính 2011 (1915) : 52）。この三神は、タベルニエの記した3つの神「灶君、先師、翁土（土公）」との関連が考えられる。

オンタオについて詳しい記述をしたトアン・アインの主な内容は、以下の通りである。オンタオ<sup>9)</sup>は常に尊敬され、第一之家主、つまり家のなかの1番の主である。礼拝をするときは先にオンタオを拝み、他の神様たちへの礼拝の許可をもらう。オンタオは、役割の異なる土公、土地、土圪の三神から成り<sup>10)</sup>、それらをまとめた「定福灶君」と書かれた字牌を置く家もある。陰暦12月23日はオンタオ<sup>11)</sup>が家族の善悪を天帝に報告に行く日であり、人々は供物と一匹の鯉を供え、金銀紙やオンタオの服・帽子などを燃やす。新しい字牌に変えるために古い字牌を燃やす。儀礼のあと鯉を川や沼に放生する（Toan Ánh 1997 (1967) : 112-120, 2000: 81-85）。調査地や資料の明示がなく、前出の「土公、灶君、芸師（先師）」との関連に言及していないなどの問題があるが、ここで注目したいのは、オンタオ三神が「土公、土地、土圪」として描かれ、新たに具体的な役割が与えられている点である。また、トアン・アインはオンタオを土公と同一の神として論を進めている。トアン・アイン以降の研究はオンタオを「土公・土地・土圪」とし、土公と同一視した記述が増えていく。1900年代半ば以降、ファン・ケー・ビンやトアン・アインの研究を基礎としながら、多くのオンタオについての研究がおこなわれた。

以上、文献からオンタオを整理すると、17世紀のオンタオの記述の最初は一神である。そしてほぼ同じ時代に民間伝承では三人が登場する話が語られていた。しかし、民間伝承にはオンタオ三神としての明記はされていない。その20年ほど後、家ではオンタオを含む三神の神が祀られていた。時代が下り20世紀初頭には、家で祀られる三神とは別に、オンタオ三神が祀られていたことが分かる。そして、20世紀半ばには家で祀られる三神の記述はなくなり、オンタオ三神に新たな役割と名前が登場する。次章以降では、以上で整理した文献記載の内容と各調査地のオンタオの実態を比較・検討していきたい。

<sup>7)</sup> ベトナム語「Buabin (ông Địa?)」とある。Buabinというベトナム語がないため、ベトナム語訳者は ông Địa（オンディア：翁地）ではないかとしている。オンディアは一般的に土地神として財神とともに祀られている。

<sup>8)</sup> 原文は灶、ベトナム語では *dầu rau* ダウザウと訳されている。

<sup>9)</sup> トアン・アインは資料のなかでオンタオについて、時に *Táo quân*（タオクワン：灶君）、時に *Thổ công*（トロン：土公）と記しているため、ここではオンタオと統一している。

<sup>10)</sup> それぞれ字牌は東厨司命灶府神君、土地龍脈尊神、五方五土福德正神である（Toan Ánh 1997 (1967) : 114, 2000: 81-82）。

<sup>11)</sup> トアン・アインはオンコン（翁土＝土公）と記している（Toan Ánh 1997 (1967) : 112-120, 2000: 81-85）。

## 2. 各地域のオンタオ

オンタオを祀る儀礼は地域によりいくつかの特徴がみられる。ここでは、北部地域のハノイ市キムラン社<sup>12</sup> (xã Kim Lan) とタイビン (Thái Bình) 省ヴトゥ (Vu Thu) 県ヴホイ (Vu Hoi) 村ミーアム (Mỹ Am) 集落 (以下、タイビン省ミーアム集落と記す)、中部地域のクアンナム省ホイアン (Hôi An) 市、南部地域はホーチミン市のチョロン (中華街) と郊外ビンチャン (Binh Chánh)、ニントアン (Ninh Thuận) 省ファンラン (Phan Rang) 市の事例を取り上げる (図1)。

調査内容は主に台所形態の変化、オンタオの祭壇、送神儀礼、供物、祭祀具、オンタオの役割である。

本稿作成のために資料収集をおこなった時期と地点は以下の通りである。

- ① 2009年1月18日タイビン省ミーアム集落においてオンタオの送神儀礼調査を実施。
- ② 2011年8月5日～25日タイビン省ミーアム集落、ホイアン旧市街、ホーチミン市、ファンラン市において聞き取り調査を実施。
- ③ 2012年8月3日～31日タイビン省ミーアム集落、キムラン社、ホーチミン市において聞き取り調査を実施。

以下に述べる家屋内の左右の表現は、本調査のインフォーマントに従い、主屋を中心に門に向かって左・右とする。また、煮炊きに使用する3つのレンガまたは粘土で作られた土製支脚は、地域により名称が異なるが<sup>13</sup>、ここでは実用品として使用する場合は土製支脚に統一し、オンタオ (神または神像) を指す場合と区別する。なお、フエ地域については次章で述べる。



図1 ベトナム地図と調査地域

### (1) 北部地域のオンタオ

ベトナム北部地域は、紅河デルタ・西北部・東北部から成る。ベトナムの2大穀倉地帯のひとつ紅河デルタはアジアで唯一の亜熱帯デルタであり、総面積148万haに1724万人が暮らすベトナムで最も人口稠密な地域である (岡江2007)。この紅河デルタはキン族を含むベトナムオン緒族やタイ系諸民族の居住の場としてドンソン期<sup>14</sup>から現在にいたるまで、周辺地域と連動して国家興亡の舞台であり続けた地域である (西村2011: i)。本稿の調査地であるキム

<sup>12</sup> 社 (Xã) は、広域の郷村。地方行政単位：県 huyện と村 thôn の中間、またはトン tổng (総) と村 làng の中間的な行政単位 (川本邦衛編2011: 1840)。

<sup>13</sup> グエン・ドン・チーが収集したオンタオの昔話のなかで、煮炊きのときに鍋を置く3つのレンガのことを北部ではダウザウといい、中部ではオンヌック (ông núc) という (Nguyễn Đông Chi 1974:219) と記している。ダウザウとは直訳すると野菜の頭という意味であり、どのような経緯で使われるようになったかは不明である。また、中南部の人々の多くは土製支脚をオンタオと呼び、ダウザウという言葉を使用するひとは僅かである。

<sup>14</sup> ドンソン期は紀元前3-4世紀頃～紀元1世紀頃 (西村2011:16, 90-91)

ラン社とタイビン省ミーアム集落は、紅河デルタに属する。

キムラン社（旧名は金蘭）は、ハノイ市郊外のザーライ（Gia Lâm）県南端、紅河左岸の提外地に位置した人口約 500 人強の集落であり、ハノイからは直線距離で 10 km 程の場所に位置する（西村 2011: 259-260）。発掘調査により 8, 9 世紀より本格的な居住が始まり、李陳朝期には高級な陶磁器を生産していた歴史的な地域である（西野 2012: 17）。

タイビン省は、首都ハノイから南西へ約 110km、トンキン湾に面した場所に位置する。紅河沿い南東に広がるデルタ地帯のなかにあるため土が肥沃で、現在でも農業が盛んに行われており、約 90% の人々が農村に暮らしている<sup>15</sup>。ミーアム集落は約 300 世帯、1000 人程が暮らしている。筆者は、ミーアム集落のオンタオについて 2012 年に報告している（鍋田 2012: 34-45）。本稿と重複する箇所もあるが、新たな調査も実施しているため、本稿でも改めて取り上げてみたい。

事例 1：グエン・ヴェト・ホン（Nguyễn Việt Hồng）氏

（キムラン社）

グエン・ヴェト・ホン氏は 1936 年生まれ。50 年前から陶磁器作りを行っている。家屋は 1930 年に木の家が建てられ、その当時の屋根は茅葺きであった。1960 年に壁ができ、90 年に現在の家屋になった。主屋は三間で、中央に祖先の祭壇が置かれている。

台所は二階建ての付属屋（居住スペース）の一階にあり、ガスコンロが置かれている。ガスコンロは 2011 年から使い始めているが、使用頻度は少なく、ほとんど古い炉に置かれた五徳や練炭コンロを使用している。古い炉は、付属屋と隣接した陶磁器窯の建物のなかにあり、1950 年頃まで自宅で作った土製支脚を使用していた。その後、最初は弱い鉄の五徳（kiêng gang）、次に現在の丈夫な鉄の五徳（kiêng thép）へと変化した。形は変わってもこれらは全てオンタオであるという。現在使用している鉄の五徳が、ホン氏にとってはオンタオそのものである（図 2）。そのため、炉にも祖先の祭壇にもオンタオを祀る香炉は置かれていない。また、禁忌として炉に置かれたオンタオ（現在は五徳）の向きは変えてはいけないという。安定しているものを変えるのは、不安定さを作るため不吉なことであるとの理由からである。

送神儀礼は、中庭に祭壇を作り供物を供えている。供物には、おこわ・鶏・酒が必須である。自分で書いた祈禱文を読み上げ、冥器（Mả）を燃やし、オンタオが天に上がるのを見送る。ホン氏の家では鯉は供えていない。祖父の代（100 年ほど前）までは鯉を供え川に放していたが、しきたりが変化して、今では冥器のなかにある車に乗って天に上がるという。また、オンタオ三神は台所の食事を管理し、オンタオ三神とは別の神であるオンコン（ông Công 翁公＝土公）が家の土地を守っているため、実際にはオンタオは四神であるという。オンタオを信仰することは物質的なことではなく精神的なことであるため、人によりそれぞれ異なるとのことである。



図 2 炉と五徳（オンタオ）

<sup>15</sup> タイビン省ホームページ [thaibinh.gov.vn](http://thaibinh.gov.vn)（最終閲覧 2011 年 12 月）

事例2：ヴ・ヴァン・ニ（Vũ Văn Nhị）氏（ミーアム集落）

ヴ・ヴァン・ニ氏は1936年生まれ、元教師である。現在、妻と長男家族の6人で暮らしている。家屋は、三間の主屋と両脇に一間の脇室、主屋の主室中央には祖先の祭壇が置かれている。主屋の左側の脇室に台所が作られ、ガスコンロが置かれている。2000年からガスコンロを使用し、以前は五徳と土製支脚を使用していた。敷地の左側に付属屋が独立して建てられ、炉が作られている。炉には鉄の五徳が置かれ、現在も祭祀などで大鍋を使用するときに使っている。

オンタオは、祖先の祭壇に香炉を置いて祀られている。字牌や神像はない。オンタオの香炉の配置について、2009年の聞き取りでは祭壇の1番左に置かれた香炉がオンタオの香炉であると述べているが、2012年の聞き取りでは真ん中の香炉がオンタオの香炉だが特に決まりはないと答えている。

送神儀礼の供物は、果物、おこわ（オレンジ色の甘いおこわ）、鶏一羽、鯉、冥器である。鯉はオンタオが天に上がるための乗り物であり、儀礼のあと川に放している。ニ氏にとってオンタオは親しみのある神で、家族を保護する神である。そのため、天に上るオンタオには、家族の幸せと隆盛を願うという。また、ニ氏は実用品としての土製支脚を毎年陰暦12月になると家の庭で粘土を捏ねて自分で土製支脚を作っていた。そして、1年に1度、陰暦12月23日のオンタオ送神儀礼のときに、新しい土製支脚に換えて、古い土製支脚は川や池に捨てていたという。しかし、いつまで使用していたかは覚えていない。

事例3：ファム・ヴァン・コア（Pham Van Khoa）氏（ミーアム集落）

ファム・ヴァン・コア氏は56歳（2012年）、職業は公務員、妻と子ども二人の四人家族。現在は妻と二人暮らしである。1985年に建てられた家屋は、主屋の中央に祖先の祭壇が置かれ、オンタオは祭壇の真ん中に置かれた香炉で祀られている。

敷地の左側には台所としての付属屋がある。2000年からガスコンロを使用し、それ以前は鉄の五徳を使用していた。今も納屋にある炉には鉄の五徳が置かれ、大鍋を使うときや家畜のエサを作るときなどに使用している。3～40年程前まで、実用品として土製支脚を使っており、市場で買ったり自分で作ったりしていたという。土製支脚の製作は、主に男性が自分の家で粘土に粃殻と灰を混ぜて作っていたという。

オンタオはどこにいるかとの質問に対して、コア氏は祖先の祭壇ではなく土製支脚または五徳にいる、妻のトゥ（Thu）氏も祖先の祭壇ではなく土製支脚にいると答えている。送神儀礼では、祖先の祭壇に果物、おこわ（オレンジ色の甘いおこわ）、鶏一羽、料理、鯉3匹、冥器を供える。そして、天に上がるオンタオへの祈禱文を読み上げたあと、冥器を燃やし、最後にオンタオの乗り物である鯉を川に放す（鍋田2012: 40-45）。オンタオは親切で優しい神であり、家族の仕事や学業と台所のことを見守る神である。そのため、送神儀礼では、家族の幸せとそれぞれの発展を祈願している。また、土製支脚を使用していたときは、陰暦12月23日の送神儀礼で古い土製支脚を池や川に捨て、新しいものを置いていたという。1986年以降、経済発展とともにオンタオに供える料理や供物が増え、儀礼は賑やかになったという。

以上が北部地域の事例である。ミーアム集落の事例からオンタオが祖先の祭壇で祀られていることがわかる。筆者は、今回の事例以外でも祖先の祭壇にオンタオが祀られているのを確認



している（鍋田 2012: 35-36）。しかし、トアン・アインの 1967 年の資料では、祖先の祭壇のすぐ隣にオンタオの祭壇を設けるとあり（Toan Ánh 1997 (1967) : 112-113, 2000: 79-80）、祖先の祭壇で祀るとは記されていない。それ以前の『安南風俗冊』やファン・ケー・ビンの『ベトナムの風俗』にもオンタオ祭壇の記述はない。ハノイ市でベトナム人家庭を調査した大西は、1995 年出版の本のなかで祖先の祭壇の 1 番右の香炉はオンタオの香炉であると記している（大西 1995: 221）。チャン・ゴック・テムも祖先の祭壇の左（東）側にオンタオの香炉が置かれるとしている（Trần Ngọc Thêm 1999:139）。次節で述べる中南部では祖先の祭壇でオンタオは祀られていないため、北部地域の特徴と言えるが、古い祭祀形式ではない可能性がある。

台所形態の変化から北部地域のオンタオをみていきたい。どの家も台所にガスコンロが置かれているが、炉には五徳があり、現在も使用している。事例 1 のホン氏は、祖先の祭壇でオンタオを祀らない理由について、土製支脚から鉄の五徳に変わってもオンタオは同じ場所（炉）にいる。今は五徳がオンタオであると述べている。ミーアム集落では炉や台所でオンタオは祀られていないが、事例 3 のコア氏と妻は、オンタオは祖先の祭壇にある香炉ではなく、土製支脚にいと答えている。また、ミーアム集落でも 30～40 年ほど前まで土製支脚を手作りし、『安南風俗冊』の記述と同様に、送神儀礼のときに古い土製支脚を捨て新しい土製支脚を置いていた。

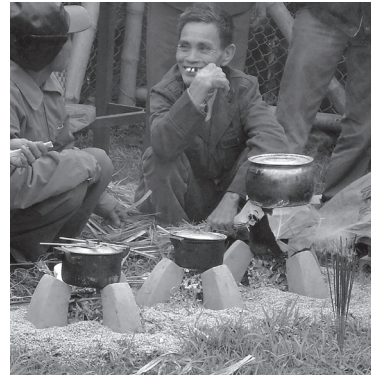


図 3 土製支脚で飯炊き競争  
タイビン省ケオ寺

これらのことから、土製支脚を使用していたときには（図 3）、土製支脚そのものがオンタオであった。しかし、土製支脚の使用がなくなり、オンタオを表すものとして新たに祖先の祭壇に香炉を置くようになったと考えられる。事例 1 のホン氏は、煮炊き道具が変化し土製支脚を使用しなくなったあとも、もともと土製支脚（＝オンタオ）を祀っていた炉で、現在もオンタオを祀り続けているといえる。

また、オンタオの性格と役割について、今回の事例と前回の事例（鍋田 2012: 36-38）の全員が、オンタオは優しい神であり家族を守っていると答えている。オンタオが家族に災いをもたらす恐ろしい神であるという意識は、現在までの筆者の調査では得られていない。

その他、送神儀礼で鯉を供え放生するのは、『安南風俗冊』にも記された儀礼だが、次節で述べるように中南部の地域ではほとんどおこなわれておらず、これは北部地域の特徴であるといえる。しかし、鯉の放生の歴史的経緯はまだ明らかになっていない。また、土公とオンタオの関係も北部地域の特徴といえる。事例 1 のホン氏がオンタオを四神と述べたように、北部地域の送神儀礼は、オンタオ三神に土公を加えた、「オンコン・オンタオ」（*ông Công ông Táo*）という名称で呼ばれることがある。2009 年に聞き取りをしたハノイ市のロアン氏は、送神儀礼ではオンタオ三神とオンコン一神の四神を祀り、オンコンは家の土地を守る神であり、門の管理もしているため、オンタオが家の門から出て天に上るためにはオンコンへお願いする必要があると述べている。ミーアム集落の祈祷師（タイクン *thầy cúng*）や T.U 氏は、オンタオは悪霊を家に入れぬ役割があると述べ（鍋田 2012: 37-38）、オンタオに土公の役割を重ねている。トアン・アインが同一視する土公とオンタオは北部地域でみることができる。

## (2) 中部ホイアンのオンタオ

ホイアンは2～15世紀頃まで中部ベトナム一帯を支配していたチャンパ王国の地であり、チャンパ王国が衰退するとベトナム人たちが住み始め、16世紀末から17世紀、18世紀とホイアン貿易港は発展を続け、とくに17世紀には日本から渡った商人たちにより「日本町」が形成された（菊池2002: 10）。現在の旧市街に残る町並みは19世紀初頭以降に造られた木造町家群や20世紀初頭に造られた洋風建物群が残る（菊池2002: 10）。

以下の事例は、昔のカマドが残る旧市街の伝統的民家である<sup>16</sup>。

### 事例4：トゥ・ファップ（Thu Pháp）邸

土産物屋を営んでいる。家屋の奥に昔のカマド、4つ口の作り付けカマドがある。家主によると、1975年までカマドを使用していたという。現在、そのカマドを祭壇としてオンタオを祀っている。祭壇には「定福灶君」と書かれた字牌（家主が書いたもの）、香炉、燭台2つ、花瓶がある。オンタオの祭壇の前の空間には不浄なものをおいてはいけないという。オンタオを天に見送る送神儀礼では、果物・花・甘いお菓子を供えて、家族の平安を祈る。オンタオは優しい神で、子どもが病気になったときに線香をあげると治るといふ。

### 事例5：トゥアン・アン・ズン（Thuan An Dung）邸

家主タイ・ティエン・ゴン（Thái Thiện Gòn）氏は57歳（2013年）。福建省出身で、ホイアンに来た当時は漢方屋を営んでいた。100年程前に建てられた家屋は、1番奥に台所がある。3つ口カマドは多少の修復はしているが、100年前のままである。石灰・漆喰・サトウキビの蜜を使って作られており、熱に強いのだという。オンタオの祭壇はカマドの上部に作られ、香炉と燭台2つ、花瓶、塩・米・水の入った瓶が置かれている。字牌は当初から置かれていない。

送神儀礼では、お茶とお酒を3杯ずつと檳榔、時々ぜんざいとおこわも供える。オンタオの好物はお茶と水飴である。水飴は近年供えるようになったという。オンタオの役割は家族の保護と生活の安定であり、家族や兄弟が仲良く出世できるのはオンタオのおかげであるという。

### 事例6：クアン・タン（Quan Thang）邸

現在、5代目から8代目までの4世代が暮らしている。祖先は中国福建省出身である。築300年の家屋は現在、ホイアン旧市街の観光スポットのひとつとなっている。北側に面した入り口を入り少し進むと、東側に「福德正神 司



図4 カマドとオンタオ祭壇、字牌

<sup>16</sup> ホイアンの調査は、ホイアン市の文化遺産の管理をおこなっている、ホイアン市遺跡保存管理センター（Trung tâm QLBT Di tích Hội An）からの紹介により実施した。

命灶君」、西側<sup>17</sup>に「天官賜福」と記された祭壇がある。この2つの祭壇が置かれた経緯については分からないという。台所は家屋の1番奥に作られている。東の壁に3つ口カマドと低い1つ口カマドが作り付けられているが、現在は使用していない。オンタオの祭壇は3つ口カマドの上部にあり、中央に「定福灶君」の字牌が置かれ、燭台2つ、小さなカップが3つ置かれている(図4)。6代目にあたる女性によると、家を作った時からオンタオの祭壇はあるという。送神儀礼では冥器と甘いものを供える。冥器は市場で売られているオンタオセット(オンタオの紙服・帽子・金銀紙・祭文等)を購入しているという。

#### 事例7: チュック・バック (Trung Bắc) 邸

曾祖父の代からレストランを営んでいる。祖先はベトナム人(キン族)である。レストランの奥にある台所は、数年前に新しくした際に古いカマドを壊し、台だけが残されている。現在はガスコンロが置かれ、その上部にオンタオの祭壇がある。祭壇には「定福灶君」の字牌が中央に置かれ、香炉、燭台2つ、赤いロウソクが1本立てられている。香炉も字牌も新しい。古いものは墓地に土を掘って捨てたという。儀礼では果物・花・冥器・バイン・トー(bánh tót 餅米の甘いお菓子)を供えるが、肉は財神に供えるものでオンタオには供えない。オンタオは祖先や財神、屋敷神のなかで1番大事な神であり、家族の健康を保護する家主のような存在だが、送神儀礼で天に上り、翌年どんなオンタオが家に戻って来るかは天の神が決めるという。

以上が中部ホイアンの事例である。ホイアンの事例の特徴の1つは、カマドが造り付けの3つ口または4つ口になっていることである。旧市街の昔のカマドを調査したチャン・ティ・スアン(Trần Thị Xuân)は、これらのカマドは19世紀末から20世紀初頭にかけて作られた旧市街特有のものであり、交易の重要な場であったことがカマドの形態にも影響していると記している(Trần Thị Lê Xuân 2010)。しかし、どのような経緯でホイアンにカマドが作られたかについては不明である。また、ホイアンでは18世紀の住居址から土製焔炉(移動式コンロ)や土製支脚が出土しており<sup>18</sup>、煮炊きに使用されていたことが分かる。しかし、筆者が実施した聞き取り調査において人々は、土製支脚の使用はないと答えている。

オンタオの祭壇は、事例4以外は古いカマドの上に小さな祭壇を設け、「定福灶君」の字牌を置いて祀っている。窪徳忠は1969年の調査で香港九龍地方には紅紙に墨書きした「定福灶君」の字牌が多くあったと記している(窪 1997: 479)。2014年に筆者がおこなった広州佛山市南海区の灶神調査でも台所に「定福灶君」の字牌が置かれていた。また、ホイアンの供物は北部に較べ、鶏の供犠もなくシンプルだが、特徴としては水飴などの甘いものが供えられていることである。甘いものの供物について中国では、竈神が天に上って家族の悪い報告をしないように、竈神の口を甘くするために関東糖(灶糖)が供えられるとある(窪 1997: 455-456)。

ホイアンには字牌や供物に中国の竈神の影響が強くみられることが分かる。しかし、ホイアンの人びとが水飴や甘いものを供える理由としては、オンタオの好物、またはオンタオの一般

<sup>17</sup> 東と西は自然方位である。ホイアン旧市街の家屋の配置は調査した8軒とも全て自然方位を用いている。また、今回取り上げることはできないが、ホイアンは古いカマドとオンタオ祭壇の方位にも特徴がみられる。別の機会に報告したい。

<sup>18</sup> 昭和女子大学はホイアンで1993年から現在も継続して発掘調査をおこなっている。土製支脚、土製焔炉の出土は、『国際文化研究所紀要』1997、『ベトナム・ホイアン地域の考古学的研究』2002のなかで報告されている。

的な供物として供えている。甘い供物を置くという点では中国の竈神の影響を受けてはいるが、現在のホイアンの人びとにとって、オンタオの口を甘くして悪事を報告させないという意識を明確にはもっていないようである。オンタオは家族を保護する優しい神である。

### (3) 南部地域のオンタオ

ホーチミン市は、かつてサイゴン（西貢 Sài Gòn）と呼ばれたベトナム南部の商業都市である。民族はキン族、華人、クメール人、チャム人などである<sup>19</sup>。チョロンは18世紀に華僑により建設され、現在ベトナム最大の中華街である。ファンラン市はホーチミンから北へ約350km離れた位置にある。9世紀初頭、13世紀の終わりから16世紀初頭に建てられたチャンパの遺跡と文化が残る街である<sup>20</sup>。

#### 事例8：グエン・ティ・タイン（Nguyễn Thị Thanh）氏（ニントアン省ファンラン市）

グエン・ティ・タイン氏は73歳（2012年）女性、カフェを経営している。1968年に現在の場所に家を建てる。二階建て家屋の一階に台所はあるが、オンタオの祭壇は二階の一室にある祭壇部屋に仏陀や祖先の祭壇と共に置かれている。本来、オンタオは台所に置くという。オンタオ祭壇に置かれた字牌には、真ん中に「灶君」の文字があり、両側に「有徳能扶宅主安」「無天可達於庭数」の文字が書かれている。この字牌は1968年に現在の家に移る以前からあったというが、いつ頃のものかは分からないという。毎日水を供え、線香をあげている。送神儀礼では、花・果物・水・冥器（オンタオの紙の服や紙銭）、鶏があれば供え、祈禱文を読み上げ家族の幸せを祈願する。冥器を燃やすことでオンタオは天に行くことができる。オンタオは家族を守る神であるが、仏陀が最も大切な神であり、2番目がオンタオ、3番目が祖先だという。

タイン氏は土製支脚について、いつまで使用していたかは覚えていないが、土製支脚を使用していたときは、送神儀礼のときに古い土製支脚は木の下に捨てていたという。

#### 事例9：リュウ・ゴック・ビッチ（Luu Ngọc Bích）氏（ホーチミン市チョロン）

リュウ・ゴック・ビッチ氏は、50代女性。父親は中国人だが、ビッチ氏はベトナムで生まれ育ったため、自身を中国系ベトナム人であるという。ビッチ氏の家は、ホーチミン市5区チョロンにある集合住宅である。普段は、ベトナム人（キン族）の夫とカンボジア国境に近い南部メコンデルタ地域のアンザン（An Giang）省チャウドック（Châu Đốc）で暮らしており、ホーチミン市に出てくるときに使用する家である。

家は一階と二階に分れ、台所は一階の奥に作られている。オンタオの祭壇は台所のガスコンロの上に置かれている（図5）。祭壇には「定福灶君」の字牌と香炉、花瓶、果物をのせる皿、小さいカップ3つが置かれている。送神儀礼の供物はぜんざい・おこわ・果物であり、肉は供えない。理由は、オンタオは菜食であり、肉は財神に供えるという。ビッチ氏は中国人もベトナム人（キン族）もチョロンも



図5 台所のオンタオ祭壇

<sup>19</sup> ホーチミン市ホームページ <http://www.hochiminhcity.gov.vn/Pages/default.aspx>（最終閲覧2013年11月）。

<sup>20</sup> ニントアン省ホームページ <http://sobn.ninhthuan.gov.vn/cucthue/>（最終閲覧2013年11月）。

チャウドックも祭祀や供物に違いはないという。

#### 事例 10：フィン・クワン・トゥアン（Huỳnh Quang Thuán）氏（ホーチミン市ビンチャン）

フィン・クワン・トゥアン氏は 1935 年生まれ 78 歳。家屋のなかにガスコンロが置かれた台所があり、その上部にオンタオの祭壇が設置されている。木製の箱型の祭壇に「定福灶君」の字牌と香炉、花瓶、コップ 3 つが置かれている。家屋の外には、レンガを積み上げて作ったカマドや南部の特徴的な土製移動式コンロが置かれ、儀礼などで大量の料理を作るときに使われる。トゥアン氏は土製支脚について、いつまで作っていたかは覚えていないが、昔は自分の家の庭でみんな土製支脚を作っていたという。

送神儀礼には、果物・おこわ・ぜんざいを供えている。肉は財神に供えるため、オンタオには供えないという。また、オンタオが天に上るときの乗り物は鯉であり、鯉が龍になって天に行くと考えているが、実際に鯉は供えていない。土製支脚を作っていたときには、送神儀礼のときに古い土製支脚を木の下に捨てていたとのことである。

以上が南部の事例である。南部では小さな祭壇を設けてオンタオを祀っている。事例 8 のタイン氏も本来オンタオは台所に置くと述べていることから、南部地域では台所でオンタオを祀り、「定福灶君」または「灶君」の文字が記された字牌を置くのが一般的だといえる。儀礼の供物として、事例 9 のビッチ氏と事例 10 のトゥアン氏は、鶏は財神の供物と述べており、ホイアンの事例 7 とも共通することがわかる。また、現在ほどの家もガスコンロを使用しているが事例 8 と事例 10 は、かつての送神儀礼では古い土製支脚を木の下に捨てていたと述べている。2 人は共に 70 代であり、彼らが子どもの頃、おそらく 60 年ほど前には土製支脚が使用され、北部のミーアム集落の事例 2、事例 3 と同じく儀礼での新古の土製支脚の交代がおこなわれていたと考えられる。

南部では、亭<sup>21</sup>でオンタオを祀る特徴がある<sup>22</sup>が、別の機会に述べたいと思う。

#### 小結

北部・中部・南部のオンタオの事例を取り上げた。現在のオンタオを祀る儀礼は各地域で特徴がみられるが、台所形態では共通して土製支脚が使用されていたことが明らかになった。

ベトナムの土製支脚は、古くはフングエン期（4000 BP-3000BP）から出土されている。ドンソン文化（紀元前 3 世紀—紀元前 1 世紀）を経て歴史時代、近年まで形態の変化はあるが継続して使用されてきた<sup>23</sup>。中部ホイアンの造り付けカマドも 19 世紀から 20 世紀初頭に作られたものであり、18 世紀の住居址からは土製支脚の一部が出土されている。ベトナムのキン

<sup>21</sup> 亭（ディン Đình）は、北部では村落の集会所であり、城隍（thành hoàng）と総称する村落の守護神が祀られている（大西 1995: 26）が、フエ地域では集落の信仰建築の中心はディンであり、ディンの主屋では基本的に集落を立村したとされる人物が開耕神として祀られているのが一般的で集落の祭祀も行われている（西村 2012b: 450）。南部の亭でも村の始祖を祀ることが多く、様々な神が東西に祀られている。

<sup>22</sup> フィン・ゴック・チャン（Huỳnh Ngọc Trảng）はホーチミン市の亭に祀られる神々を詳細に調査している。そのなかにオンタオ（東厨司命）が祀られていることが記されている（Huỳnh Ngọc Trảng 1993）。筆者もその資料をもとに 2012 年にオンタオが祀られた亭を調査した。

<sup>23</sup> フングエン期の土製支脚は梅原末次（梅原 1944: 75-78）、ドンソン文化の土製支脚は西村昌也（2011: 49）が報告をしている。またハノイ歴史博物館にはフングエン期、ドンソン文化の土製支脚の展示がある。

族は、ホイアンの造り付けカマドを除いて、近年まで炉に土製支脚、または土製焔炉や五徳を置いて煮炊きをしてきた。そして北部・南部では40～60年前まで、土製支脚を使用していた頃はオンタオ儀礼で土製支脚の交換がおこなわれていた。以上のことから、土製支脚を使用しつづけるなかで、土製支脚自体をオンタオとして祀ってきたが、近年の台所形態の変化により、オンタオを祀る形式も変化した。また3つの土製支脚がベトナムのオンタオ三神を作りあげた大きな要因であると考えられる。

北部・中部・南部におけるオンタオの両義性について今回の事例からは、オンタオが家族に災いをもたらす恐ろしい神といったマイナス面についての話は得られなかった。しかし、両義性を持たないと断言することはできない。今後、各地域の社会状況や時間軸も含めさらに多くの調査が必要である。今回の事例においては、現在の人びとのオンタオ観念としてマイナス面が見られないとして、次章のフエ地域のオンタオと比較していきたい。

### 3. フエ地域のオンタオ

#### (1) フエ地域の歴史的概要

現在のフエ地域は、13世紀以前はチャンパ王国が築かれていた。1306年にベトナム陳朝の皇女をチャンパ国王に嫁がせた代償として、ウリク州が大越に割譲され、翌年には順化(Thuan Hoa)と改名され、以降多くのキン族が居住するようになった<sup>24</sup>。

1558年に北部ベトナムから阮潢<sup>25</sup>(1525-1613年)が順化に入府し、広南阮氏による独立王国的な発展をしていく<sup>26</sup>。北緯17度線を境に中南部ベトナム(ダンジョン Đàng Trong)と北部ベトナム(ダンゴアイ Đàng Ngoài)との間で2世紀半近く分断が続いたが、その間ダンジョンでは風水観念に基づいた都城、都市を建設し、外港として清河(タインハー Thanh Hà)港町が誕生した。この時代は、外国人商人などが訪れる貿易港として大きく発展した時代である。また、南部への領土、領海の拡大は現南部ベトナムの範囲に達し、南進は完了した<sup>27</sup>。

その後、広南阮氏の後裔阮映が1802年にベトナムを統一し越南阮朝を樹立した。しかし、1858年フランス軍によりベトナムは占領され、1945年ベトナムは独立を果たすが、翌年1946年第一次インドシナ戦争開始、1954年ジュネーヴ国際会議によりベトナムは再び北緯17度線で南北が分割された。その後のベトナム戦争<sup>28</sup>を経て1975年戦争は終結し、再びベトナムは統一された。1993年、フエの遺跡群はユネスコ世界文化遺産リストに登録され、それに伴い修復事業が進められ現在も継続している。現在、フエでは伝統文化の保存と継承にも力を注いでいる。

#### (2) フエ地域の民間信仰

フエ地域の民間の家でおこなわれる年中行事(表2)を以下に記した。

<sup>24</sup> グエン・ヴァン・ダン 2012: 482。

<sup>25</sup> 広南阮氏の第一代統治者、中南部ベトナムの基礎を作った人物(ファン・タイン・ハイ 2012: 498)。

<sup>26</sup> ファン・タイン・ハイ 2012: 497-498。

<sup>27</sup> ファン・タイン・ハイ 2012: 499。

<sup>28</sup> ベトナムではベトナム戦争を抗米救国戦争 *kháng chiến chống Mỹ, cứu quốc* と呼ぶ。

表2 フエ地域の家庭での年中行事（陰暦）

月	日	年中行事
1月	1日	元旦《Tết Nguyên Đán》
	3日	祖先の見送り儀礼《Cúng đưa》（2日～5日の間）
	8-9日	新年仕事始めの儀礼 本命神儀礼 《Cúng đầu năm (cúng bà)》 8日夜～9日朝にかけておこなう
2月		土神儀礼《Cúng Đất》 2月中のある日、または8月
5月	5日	端午の節句《Tết đoan ngo》
	23～31日	1885年フランス侵攻、フエ陥落に伴う死者を祀る儀礼《Cò hồn》
7月	15日	祖先供養《Lễ Vu Lan (Lễ báo hiếu)》
8月		土神儀礼《Cúng Đất》 8月中のある日、または2月
	15日	中秋節《Tết Trung Thu》
10月		新芽儀礼《Cúng com mới》（10月または8月におこなう） 日にちは家族やその年によって異なる
12月	23日	オンタオ送神儀礼《Tết ông Táo》
	30日	大晦日 オンタオの戻る日、祖先を迎える儀礼、除夜儀礼 《Cúng giao thừa (đêm trừ tịch)》

出典：2014年聞き取りとフィン・ディン・ケット氏のご教示により筆者が作成

1章で記したベトナムの年中行事と比較すると、フエ地域では、1月8-9日の新年仕事始めの儀礼、2月（8月）の土神儀礼、5月23～31日の儀礼が特徴的である。1月8-9日は男性と女性の本命神（bồn mạng）への儀礼がおこなわれる。ここでは、オンタオと関連する本命神と土地神について簡単に述べたい。

### ① 本命神

本命神（thần bồn mạng）には、家主の男性を保護する神と女性（家主の妻）を保護する神がいる。男性の本命神は、主屋にある祖先の祭壇の奥、高い位置に神棚（tran thờ）<sup>29</sup>を設けて祀っている（Huỳnh Đình Kết 1998: 33）。この男性の本命神の祭壇をチャンオン（tran (trang) ông<sup>30</sup>）と呼ぶ。チャンオンには、「土公、先師、灶君」の三体が祀られている<sup>31</sup>（Trần Đại Vinh 1995: 79-85）。チャンオンに祀られるオンタオと台所で祀られるオンタオは同じ神である<sup>32</sup>。しかし、台所で祀られるオンタオは家族、特に子どもを保護する神であるが、チャンオンで祀られるオンタオは家の主人だけを見守る神である<sup>33</sup>。

女性を保護する本命神の祭壇はチャンバー（trang (tran) bà）と呼ばれ、主屋の東側の高い位置に置かれている（Trần Đại Vinh 1995: 85-86）。チャンバーに祀られる神は、西宮王母本命聖徳先婆（Tây cung vương mẫu bồn mạng thánh đức tiên bà）<sup>34</sup>という女神であり、成人してから

<sup>29</sup> フィン・ディン・ケットは tran thờ (Huỳnh Đình Kết 1998: 33) と表しているが、チャン・ダイ・ヴィンは Khám thờ (Trần Đại Vinh 1995: 79) と表現している。Tran は「棚」、本田氏の訳は「欄」（フィン・ディン・ケット 2005: 213）であり、khám は「龕」である。どちらも木製の小さな祭壇を表す言葉である。

<sup>30</sup> フィン・ディン・ケットは tran ông, チャン・ダイ・ヴィンは trang ông と表記している。

<sup>31</sup> それぞれの正式名称は、「五方土公尊神、歴代先師尊神、東厨司命灶君」であり、順に、「土神、職業神、竈神」である。先師は家主である男性の職業を保護する神である（Trần Đại Vinh 1995: 79-85）。

<sup>32</sup> 2013年、チャン・ダイ・ヴィン氏のご教示による。

<sup>33</sup> 2013年、フィン・ディン・ケット氏のご教示による。

<sup>34</sup> フィン・ディン・ケットは女性の本命神は九天玄女（Cửu Thiên Huyền Nữ）している（Huỳnh Đình Kết 1998: 38）。ベトナムの九天玄女に関しては大西氏の詳しい研究がある（大西 2012c）。

60歳までの女性がこの西宮王母を祀る(Trần Đại Vinh 1995:85-86)。筆者の調査でもチャンパーには西宮王母の文字が記された神画が祀られ、祭具店でも西宮王母と書かれた神画が多く売られていた。チャンパーも男性の本命神と同じく、それが保護するのは家主の妻のみであり、そのため60歳を過ぎると本命神を息子の妻(嫁)へ引き渡す。

この男性・女性の本命神、チャンオン・チャンパーの儀礼は一年に一度、陰暦1月8日の夜から9日にかけておこなわれる。この儀礼が済むと、人々は新年の仕事が始まるのだという。

## ② 土神 (Thần Đất)<sup>35</sup>

陰暦2月または8月の吉日に儀礼がおこなわれる。この土神儀礼では、井戸神や門神などの屋敷神やオンタオ、自分たちの土地(屋敷)に自分たち以前に居住していた人々、戦死した兵士や行き場がなくさまよっている幽霊、フエ地域にもともといたチャンパーの人々や少数民族の人々を区別することなく全て祀るという。そして、敬意と感謝をもって供養を行うのが土神への儀礼であるという<sup>36</sup>。

儀礼に際しては、3つの机を用意し、各机には線香、ランプ、果物、檳榔、キンマ、酒、金銀紙を置く。上の机には、鶏一羽とおこわ、ぜんざい、中の机には、大きな肉などのごちそう、下の机には、おかゆや米、蒸したキャッサバが置かれる。また、チャム人への特別な供物として茹でた野菜と芋類、魚とエビの串焼きが置かれる(Trần Đại Vinh 1995: 80-82)。

この非常に多くのご馳走を供える土神儀礼の根底にあるのは、土地に関わる神や亡者に対する鎮魂であると考えられる。特に、チャム人に特別な供物を用意するのは、フエの土地を奪われたチャム人たちが引き起こす祟りを恐れ、祟りからくる災いを回避するためであろう。土神儀礼が屋敷の敷地内ではなく、門の外に祭壇を設けておこなうことにも現れている。

## (3) フエ地域のオンタオ

調査地は、フンチャー(Hương Trà)県フォンホー(Hương Hồ)社、フォンディエン(Phong Điền)県フォンホア社フォックティック(Phước Tích)村、フーヴァン(Phú Vang)県マウタイ(Mậu Tài)社シン(Sinh)村。

本稿作成のために資料収集をおこなった時期と地点は以下の通りである。①2012年1月14日～17日オンタオ送神儀礼(陰暦12月23日)調査を実施。②2012年8月3日～31日フエ市内、フォックティック村において聞き取り調査を実施。③2013年6月10日～30日シン村において聞き取り調査を実施。④2014年8月25日～9月20日シン村、フォックティック村において聞き取り調査を実施。



図6 フエ地域 フエ王宮周辺(上)  
トウアティエン・フエ省(下)

<sup>35</sup> thần đất は土地神と訳すこともできるが、ベトナムの他の土地神と区別するため、「土神」としている。

<sup>36</sup> チャン・ダイ・ヴィン氏2013年、フィン・ディン・ケット氏2013年のご教示による。



それぞれの調査地の概況は以下の通りである。

フォンホー社はフエ市から約 4 km 西南方向の場所に位置し、面積 3375ha、農業地が 2352.43h を占める人口 9,407 人（2013 年調べ<sup>37)</sup> の村である。フォックティック村はフエ市の中心地から北西へ約 30km に位置し、2008 年に国史跡に指定された伝統的集落である。村の面積は約 28ha、現在 117 件ほどの建物があり、そのなかに築 200 ～ 100 年を経過する木造民家の主屋が 24 軒ほどある（菊池 2010: 184, 2011: 5）。焼締陶器を中心とした窯業生産が 17 世紀以前から行われていた村である（菊池・小野田 2011: 136）。シン村は北と西を香河に接し、別名「頼恩（ライアン Lài Ân）」と呼ばれ『烏州近録』<sup>38)</sup>にも記された歴史の古い村である。この村では、オンタオ儀礼で使用するシン村版画が製作されている（図 6）。

#### 事例 11：フィン・ディン・ケット（Huỳnh Đình Kết）氏（フォンホー社）

フィン・ディン・ケット氏はフエ民間文化博物館館長であり、フエの民間信仰研究者である。年齢は 60 歳（2014 年）、3 人の子どもは独立し、現在は妻と 2 人暮らしである。1981 年に建てられた家屋では、主屋に祖先の祭壇が置かれ、主屋の左側に付属屋があり、その奥に台所がある。

ガスコンロの置かれた壁の上部にオンタオ祭壇があり、香炉、オイルランプ 2 つ、花瓶、果物皿、水の入ったコップ、オンタオの神像が置かれている。オンタオ祭壇は家主の生まれ年で方位が決まり、間違った方位に祀ることは避けなければならないという。ケット氏の家では 1999 年からガスコンロを使用している。以前は鉄の五徳を使用し 1981 年以前は市場で購入した土製支脚も使用していた。現在の家屋を建ててから小さな土製の神像を置くようになったのだという。土製の神像は 1 年に 1 度送神儀礼で新しいものに交換する。一般的な送神儀礼の供物は、バナナ、果物、花、おこわである。鶏は土神への供犠であるため、オンタオには供えない。その他、紙銭とオンタオ版画、アオビン（áo Binh オンタオの紙の服）も供えている。

オンタオは親しみのある神で家族の生活を守り、病気になったときや、女性が子どもを産むときには助けてもらうという。特に子どもの命を保護する役割があり、0 歳から 10 歳までの子どもは病気にかかりやすいため、子どもをオンタオに預ける儀礼があり、家主が紙に子どもの名前・生年月日を書いてオンタオの神像の下に置き祈念する。子どもが 10 歳になり、丈夫に育つことができたならオンタオに感謝を伝えて、神像の下に置いていた紙を取る儀礼をおこなう。最近ではほとんどこの儀礼は行われないが、フエの民間信仰のひとつであるという。

#### 事例 12：ホアン・ディン・トアン（Hoàng Đình Toàn）氏（フォンホー社）

ホアン・ディン・トアン氏は、55 歳（2012 年）、妻と子どもの 6 人家族である。職業は、農業と左官業である。1986 年から現在の家屋に住んでいるという。

主屋の右側に付属屋が建てられ、その中に炉が置かれている。炉には鉄の五徳と、手作りの土製コンロが置かれている。土製支脚は、1999 年頃まで市場で購入したり自分の家で作ったりして使用していたが、土製ものは洪水などの際に水に濡れると壊れやすくなるため、使うのをやめたという。トアン氏の家ではまだガスコンロは使用していない。

<sup>37)</sup> トゥアティエン・フエ省行政ホームページ <https://www.thuathienhue.gov.vn>（最終閲覧 2014.12.18）

<sup>38)</sup> 1553（1555）年楊文安により編纂されたフエ地域の地誌。現存する『烏州近録』は加筆されている。

オンタオの祭壇は炉の置かれた壁の上部にある。祭壇には香炉、花瓶、果物、香炉の奥にオンタオの素焼きの神像が置かれている。神像は台所を作った1986年からあり、炉で土製支脚を使用しなくなってから小さいオンタオ（神像）を祀るようになったという。小さいオンタオは1年に1度送神儀礼で新しいものに交換する。送神儀礼の供物は、果物、花、ぜんざい、おこわである。トアン氏はオンタオを祀らないと心配だといひ、子どもの保護をする役割があり、子どもが病気になったときにオンタオの前で祈ると治ると信じている。

事例13：ホアン・ディン・ゴイ（Hoàng Đình Ngôi）氏（フォンホー社）

ホアン・ディン・ゴイ氏は59歳、妻と子ども5人家族である。職業は材木屋。家屋は1997年に建てられた。主屋の左側にある付属屋に入ると、ガスコンロが置かれた台所がある。ガスコンロは10年ほど前から使用している。

付属屋の1番奥に炉があり、オンタオの祭壇は炉の上部に作られている。祭壇には、香炉、花瓶、コップ、陶器の小さい壺、香炉の奥にオンタオの神像と版画が置かれている。三神が象られた素焼きのオンタオ神像である。土製支脚は子どもの頃に使用していたが、詳しい年は覚えていないとう。土製支脚を使って調理をしていたときにはオンタオは炉で祀り、土製支脚が使われなくなってから、上部に祭壇を作りオンタオの神像を置いて祀っている。送神儀礼では、果物、バナナ、花、おこわ、ぜんざいを供え、祭壇に祀られた神像は新しい神像に交換する。オンタオは信じて祀れば優しい神だが、信じないと怖い神になる。今は祀っているため、温かく満足した生活を家族に与えてくれているという。

事例14：キー・ヒュウ・フック（Kỳ Hữu Phước）氏（シン村）

キー・ヒュウ・フック氏は66歳（2014年）、シン村で版画製作を行っている。祖先は中国・海南島出身で、家譜によると19代目であり、シン村で版画を始めたのは9代前からだという。

主屋の左側にある付属屋に入ると、すぐにガスコンロが置かれ、1番奥に炉が作られている。炉の左上の壁にオンタオの祭壇が置かれている。祭壇には香炉とコップ1つ、造花、香炉の奥にオンタオの神像と版画が置かれている。版画はフック氏が製作したものである。また、炉には上部半分が壊れた土製支脚が置かれており、現在も使用している。

事例15：レ・チョン・ダオ（Lê Trọng Đào）氏（フォックティック村）

レ・チョン・ダオ氏は70歳（2012年）、妻と子どもの3人暮らし。元教師。築100年以上の家屋は、主屋の左側に付属屋が建てられ、その奥に台所がある。台所は建物の奥の人から見えにくい場所に作るという。最初の炉は地炉であったが、1950年から高台の炉に作り替え、今は台のみが残っている。1980年代にガスコンロを使い始め、以前はオイルコンロ（bếp dầu）や鉄の五徳を使用していた。土製支脚は1950年頃まで村の窯で作っていたが、壊れやすいために鉄の五徳に換えたという。

オンタオの祭壇は、昔の炉のあった場所の上部に作られている。祭壇には、香炉、花瓶、花、果物、水の入ったコップ、檳榔とキンマ、香炉の前にオンタオの神像と神像の下に版画が置かれている（図7）。漆が塗られた三神を象った神像である。ダオ氏が子どもの頃から土製品のオンタオ神像はあったという。毎年、送神儀礼のときに古い神像を見送り、新しいものに交換

している。祖先の祭壇の上部に灶主(Chú Táo)が置かれている。灶主は、男性の本命神であり三神であるため香炉が3つ置かれている。灶主としてのオンタオも台所で祀られるオンタオも役割は同じであり、オンタオはふつうの人(人間に近い存在の神)、全体的な神で善を導く神である。家のなかのことを全部みており、送神儀礼の日に天に上り玉皇上帝に報告する役割があるという。

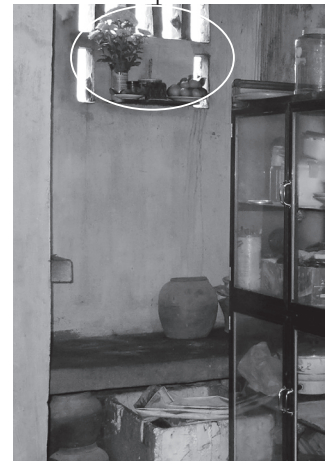


図7 昔の炉とオンタオ祭壇

#### 事例 16 : レ・チュン・フー (Lê Trọng Phú) 氏

(フォックティック村)

レ・チュン・フー氏は50歳、現在一人暮らし、職業は看護師である。家屋は約140年前に建てられた。主屋の左側に付属屋があり、その1番奥に台所が位置している。現在はガスコンロが置かれているが、以前は高台の炉を使用していた。ガスコンロに変えたのは1985年頃で、それ以前は五徳を使用していた。土製支脚は、1980年頃まで村の窯を利用して村人みんなで作っていたという。

オンタオの祭壇はガスコンロの上部にある。祭壇には、香炉、花瓶、オイルランプ、燭台、皿には檳榔とキンマ、香炉の奥にオンタオの神像が置かれている。漆が塗られた三神の土製品である。三神の土製品は生まれた頃から祀っており、おそらく祖父か曾祖父のころからではないかという。送神儀礼の供物は、果物、バナナ、花、おこわ、ぜんざいを供え、肉は供えないという。オンタオは優しい神であり、子どもを保護する役割がある。そのため、子どもが泣き止まないときにはオンタオに線香をあげると、子どもは泣き止むのだという。

#### 事例 17 : チュン・ティ・トゥ (Trương Thị Tú) 氏 (フォックティック村)

チュン・ティ・トゥ氏は女性、年齢は84歳(2012年)。現在一人暮らしで子どもたちは近くの村に住んでいる。家屋は築100年以上である。トゥ氏はここで生まれたが、一度家を離れ1975年に戻ってきている。主屋の左側に建てられた付属屋に高台の炉が置かれている。炉は1975年から変わっていない。大きさは横142cm 縦94.5cm 高さ78cm。

高台の炉の奥の少し高くなった場所をオンタオの祭壇として、香炉と造花、香炉の奥にオンタオの神像が置かれている。三神を象った土製品は、1975年から変わっていないという。毎年陰暦12月23日の儀礼で新しいオンタオ神像に交換している。供物は普段はバナナを供えるが、送神儀礼では供えたあと自分で食べるため、特に決まった供物はないという。オンタオは優しい神で家のなかを管理し、いつもオンタオに助けてもらっているという。

土製支脚は家に戻ってきたときから使用していないが、30年程前まで村で作っており、少し前まで90歳になるおじいさんが陰暦11月になると作っていたという。

また、筆者の通訳者であるファン・ティ・タイン・ヴァン（Phan Thị Thanh Vân）氏<sup>39</sup>もオンタオについて話を聞かせてくれたため、以下に記しておきたい。

ヴァン氏は30代女性。フエ市旧市街に夫と2人の子ども、夫の両親と暮らしている。ヴァン氏が幼い頃、家では炉で土製支脚を使用していた。その後、土製支脚を使用しなくなったあとも、1986年ごろまで地炉に土製支脚を置き時々火をつけて祀っていたという。

ヴァン氏は、オンタオは非常に重要な神であるという。ヴァン氏の両親は、結婚してフエ市に新しい家を建てたが、当時は土地も狭く、特にオンタオへの強い信仰もなかったため炉（オンタオ）の配置に注意を払っていなかった。その後、父親が突然、原因不明の神経の病気にかかり、人の顔も道路も何もかも分からなくなってしまった。病気が治らないまま半年程過ぎ、占い師のもとに行くと、炉（オンタオ）の方角が父親と合わないために病気になったと言われた。炉の配置を正しい方位に変えたところ、とたんに病気が治ったという。1960年頃の話である。

ヴァン氏はこのような話は特別ではないという。家族に突然、原因不明の不幸な出来事が起きた場合、占い師に見てもらおうと多くがオンタオの配置か、井戸に原因があると言われるという。そのため今でも特に台所の配置は大事にし、家を建てるときや引越しのときには、必ず吉日と時間を調べてオンタオを置くのだという。

#### (4) フエ地域のオンタオ送神儀礼

フエに残されている竈神経文『灶君経』によると、竈神は陰暦12月24日子の刻に天に上るため民間人は23日に儀礼をおこなう<sup>40</sup>。また、儀式の後に再びオンタオ<sup>41</sup>を見送らなければならないため、大きな木の根本や地域の廟の片隅に神像をおく（Trần Đại Vinh 1995: 85）。

実際に送神儀礼は23日におこなわれ、神像や土製支脚は木の下や廟などに捨てられている。しかし、儀礼をおこなう時間は様々である。少しでも早くオンタオを天に送り願いを届けたいと、23日日付が変わると同時に家での儀礼を済ませ、廟にオンタオ神像や土製支脚を捨てに来る人も多い。また、儀礼は夕方以降がいいという考えもある。フィン・ディン・ケット氏もそのひとりである。ここではケット氏の家でおこなわれた送神儀礼を紹介する。また、オンタオ送神儀礼の3ヶ月程前から神像の製作が始まり（鍋田2014: 61-67）、陰暦12月になると市場などでオンタオの神像や版画が売られるようになる。



図8 木の下に捨てられた神像（左）  
捨てられた神像拡大（右）

<sup>39</sup> ファン・ティ・タイン・ヴァン氏は古都フエ遺跡保存センター（Trung tâm Bảo tồn Di tích Cố đô Huế）に所属している。古都フエ遺跡保存センターは、フエの文化遺産の保存・修復・管理をおこなっている機関である。

<sup>40</sup> 原文「十二月二十四日子晝。上奏天曹。世人宜前於二十三日。虔誠齊供敬送。至三十日回位。各宜虔誠迎接。…」

<sup>41</sup> チャン・ダイ・ヴィンはオンタオの神像をバーダウザウ（ba đầu rau）と記している。

## 事例 18：フィン・ディン・ケット家の送神儀礼

陰暦 12 月 23 日の送神儀礼は、空が暗くなってから行う。儀礼を行うのは、家主であるケット氏である。まず、(1)古いオンタオや花などを片付けて新しいオンタオの神像や供物を祭壇に置く。供物は、バナナ一房、花、茹でた豚肉、おこわ、水、金銀紙、紙銭、オンタオ版画である。(2)祖先の祭壇に送神儀礼のあいさつをする。あいさつの内容は以下のとおりである。①当日の年月日「本日は（陰暦）2012 年 12 月 23 日です。」②夫婦の名前（子どもたちは独立して家族を持っているため夫婦の名前のみ）「わたしは□です、妻は○です。」③儀礼をすることを伝える「これからオンタオを天に送る儀礼をします。」(3) 井戸の神、門神と敷地の神へのあいさつをして、台所へ向かう。(4)祭壇のランプを灯し、新しい線香に火をつけ、オンタオの祭壇に向かい、「新年からの 1 年間をどうかお守りください。」と祈願する。(5)家でのオンタオ儀礼が終わると、一年間祀っていたオンタオ神像や花、線香の残りや香炉の砂などを、家の近くの三叉路に捨てる。この三叉路は、チャン・ダイ・ヴィンの記した大きな木の根元や廟の一角（Trần Đại Vinh 1995: 85）と同じ役割の場所である。フエ市内でも送神儀礼のあとに神像などを捨てた跡が様々な場所で見られる（図 8）。

以上、フエ地域では、祭壇にオンタオ神像とオンタオ版画を祀り、送神儀礼でオンタオ神像の見送りがおこなわれる。儀礼の供物の特徴は、オンタオに肉は供えず、鶏は土神儀礼で供犠する。また、オンタオの役割として特に子どもの保護がみられる。事例 11 のケット氏の述べたオンタオに子どもの命を預ける儀礼については、南部キエンザン（Kiên Giang）省ハーティエン（Hà Tiên）市でもおこなわれている<sup>42</sup>（Lê Trung Vũ 2003:47）。両者の関係はまだ不明である。

筆者の通訳者ヴァン氏の父親の話には、オンタオがもつ両義性について述べられている。次章の考察で取り上げていきたい。

## (4) 小結 一各地域との比較からみたフエ地域のオンタオ一

ここではオンタオ神像と送神儀礼での神像の見送りについてみていきたい。チャン・ダイ・ヴィン、フィン・ディン・ケット、大西、フィン・ゴック・チャンは、送神儀礼での神像の見送りをフエ地域のオンタオ儀礼として取り上げている（Trần Đại Vinh 1995: 85, Huỳnh Đình Kết 1998: 32-33, 2001: 52, 86, 大西 2002: 96-97, Huỳnh Ngọc Trảng, Nguyễn Đại Phúc 2013: 49-50）。

現在、送神儀礼で使われるオンタオ神像は 10～15 年前に新しく作られた三神を象った小型の土製品である。それ以前は土製支脚を象った小型の土製品や実用品も兼ねた土製支脚を使用し、神像を製作するディアリン村でも 50 年程前は土製支脚を神像として製作していた（鍋田 2014: 68）。筆者の通訳者であるヴァン氏の家では、土製支脚を使用しなくなったあとも、1986 年ごろまで地炉に土製支脚を置きオンタオとして時々火をつけて祀っていたという。オンタオ神像製作者ヴォー（Võ）氏の家では、現在でもオンタオ祭壇とは別に、炉で土製支脚をオンタオとして祀っている（図 9）。オンタオ神像の形態の変化は、地炉での土製支脚や五徳の使用から高台にガスコンロが置かれる現在の台所へと形態が変化するなかで起きている

<sup>42</sup> オンタオは家主の小さな子どもの命を保護する機能がある。もし子どもが病弱であればオンタオに子どもを預けるお願いをしなければならない。10 歳になり健康で普通の子どものように成長できたら子どもを返してもらいう儀礼をしてオンタオに恩返しをする（Lê Trung Vũ 2003:47）。

(鍋田 2014: 70)。

以上のことから、フエ地域の特徴といわれるオンタオ神像の見送りは、本来は土製支脚を使用しておこなわれていたものであった。そして、土製支脚の新旧の交換は、『安南風俗冊』にも記され、北部地域や南部地域でも40～60年前まで土製支脚を使用していたときにはおこなわれていた。すなわち、北部や南部で台所形態の変化とともにおこなわれなくなった陰暦12月23日送神儀礼での土製支脚の交換が、フエ地域では土製支脚

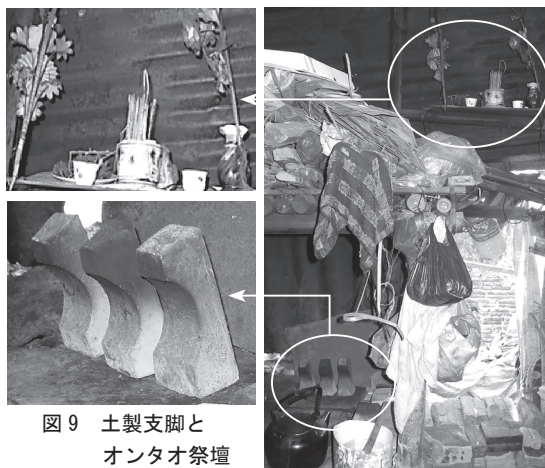


図9 土製支脚と  
オンタオ祭壇

から小型のオンタオ神像へと形を変えて継続されているということである。そして、土製支脚から三神を象った小型の土製品への神像の変化は、フエ地域独自の変化であるといえる。

#### 4. 考察 —オンタオの両義性、災異神としてのオンタオ—

フエ地域におけるオンタオを祀る現在の儀礼は、なぜ他地域の変化と異なりオンタオ神像の形態を変化させながらもより古いベトナムのオンタオ儀礼の形式を継承しているのか。オンタオの両義性から考察をしていきたい。

フエ地域の人々にとってオンタオは家族、特に子どもを保護する最も身近で重要な神である。しかし儀礼を継承させてきた要因のひとつとして、人々の抱く恐れが最も身近で最も影響力の強い神であるオンタオに「災異神としてのオンタオ」という役割を与えたことにあるのではないかと考える。以下にその考察を述べていきたい。

オンタオの役割は、ベトナム全土で家族を見守る神として共通している。フエ地域の聞き取りでもほぼ全員が、優しく家族を保護する神と述べている。そのなかで、事例13のホアン・ディン・ゴイ氏の「信じて祀れば優しい神であるが、信じなければ怖い神」という言葉には、人びとのオンタオに対する観念が集約されていると思われる。フエ地域においては、現在もオンタオは無条件に家族を守護する神ではなく、両義的な神である。

筆者がこのように考える根拠の1つは、3章(3)で記した通訳者ファン・ティ・タイン・ヴァン氏の両親の話にある。ヴァン氏の家族は、父親の原因不明の不幸な出来事はオンタオが引き起こしたと信じている。家族を守護するはずのオンタオが、家族に災いを起こした1つの事例である。筆者はこれまでの聞き取りで、ヴァン氏と同様の事例は聞いていない。しかし、ヴァン氏は親類や近所のひとたちにも起きているため、特別なことではないという。また、ヴァン氏の家族は、当時父親のオンタオ信仰が薄かったために、オンタオの配置に注意を払わず、そのため災いが起きたと考えている。これは、事例13のゴイ氏の「信じなければ怖い神」に通じると思われる。ゴイ氏からはオンタオが怖い神である具体的な話は聞いていない。しかし、今は祀っているから満足した生活を家族に与えてくれる、という言葉の裏には、ヴァン氏と同じく正しくオンタオを崇拜することで家族を守護してもらおうが、大切に崇拜しなかったときには家族に災いが降りかかると意識していると捉えることができる。事例12のトアン氏の

オンタオを祀らないと心配だという言葉にも同様の思いが感じられる。また、オンタオを祀る場所については、事例 11 のケット氏も祭壇の方位は間違っていないと述べている。そこにも、オンタオの祀り方を誤れば、家族に災いが起きるといった恐れがあると思われる。

家族を守護する一方で、家族の不幸や災いの原因をオンタオと結びつける地域は、今回の事例においてはフエ地域のみであった。フエ地域のオンタオが子どもを保護する役割をもつことも合わせて、以下にフエ地域のオンタオが災異神の側面を持つと考える 3 つの根拠を挙げて考察する。

### (1) 司命神として

オンタオが災異神となる背景には、中国の竈神が東厨司命灶君の名称を持ち、人間の寿命を左右する司命神としての役割を担っていることが関係していると考えられる。ベトナムでは東厨司命灶君の字牌は、ハノイの玉山祠やホーチミンの廟で祀られている。フエの翁寺 (Chùa Ông 関帝廟) で刻印された経文『灶君経』にも司命灶君としての役割が記されている。

家族の善悪を天に報告し、翌年の家族の禍福を決定し、また人々の命までも司るオンタオは、現在フエ地域以外では、福をもたらす家族の保護を担う神としての面だけが強調されている。しかし、フエ地域では家族を守護する役割と同時に、子どもの命を預かる役割を担っている。ドー・ラム・チ・ラン (Do Lam Chi Lan) は、オンタオが新生児を保護する契約をする際の仲介役であるとして、病弱で育ちにくい子どもを神仏に「売り」、10歳まで保護してもらうために捧げる証書 “bán khoán” は、オンタオが仲介して成立する。しかし、約束を違えお礼参りをしなければ、子どもへの災厄があると記している (Do Lam Chi Lan 1998: 190)。そこには、オンタオの司命神としての重要な役割と災異神としての側面が現れているといえる。ヴァン氏の父親の場合も原因不明の病を引き起こすといった災いにより人間の命を左右する司命神としての役割が存在していると考えられる。

### (2) 土地神として

フエ地域のオンタオが司命神としての役割を担い災異神となる背景には、土地に関わる災いへの恐れが考えられる。フエ地域には、3章(2)②で述べた土神の儀礼がある。この土神は、北部や南部地域で財神とともに祀られる商売繁盛の土地神とは異なり、土地に関連する全ての神々や亡者に対しておこなう鎮魂儀礼である。特にフエ地域の人々は、自分たちの祖先が先住民であるチャム人の土地を奪ったことによる祟りに対する畏怖は強く、17世紀においては仏教による慰霊がおこなわれていた (大西 2012a: 14, 2012 b: 18)。現在においても、チャム人への畏怖は継続している。

フエの人々が土地に関わる災いを恐れる背景には、フエ地域の気候条件が厳しく、北部南部地域に比べ農地が非常に少ないことがあげられる。『越南開国志伝』<sup>43</sup>には、広南国初代当主である阮潢の中部派遣に際し、広南と順化の二処が非常に悪地であると伝えた記述がある<sup>44</sup>。

<sup>43</sup> 広南阮氏の吏部尚書阮科占 (1659-1739) が 1719 年に撰述 (大西 2003: 114)。

<sup>44</sup> 「妾竊聞廣南、順化二處、乃毒峯惡水、凶蠻之地、人皆惡之、」

また『撫辺雜録』<sup>45</sup>では、広南国 200 年余の中部開拓を総括して、人口に対して実田が少なく、ドンナイからの米が途絶えると米価が高騰すると記されている<sup>46</sup>。

フエ地域の厳しい自然環境のなかで人々が生活をしていくためには、土地に関する様々な災いを回避する必要がある。祟りからくる災いを回避するためにも、常に家にいて家族を見守るオンタオに自分たちが関わる土地を祈願してきた。しかし、同時にそれは土地に関する災いをオンタオと結びつけることとなったと考えられる。現在でも、家屋の配置や建築増築、井戸掘りなど土地と密接な事柄には吉日や吉方位を選んでオンタオを配置したり、オンタオに祈願したりと必ず土地とオンタオが関わっていることからみることができる。

### (3) 火神として

また、火災への恐れも災異神としてのオンタオの一つと考えられる。『大南一統志』<sup>47</sup>には、フエ王宮で明命 7 年 (1826) に火神を祀る廟を建て毎年儀礼を行っていた記載がある。『嘉定通志』<sup>48</sup>では、オンタオ祭祀と八卦の火を結びつけて記している<sup>49</sup>。民間では、『灶君経』にオンタオが火を司ること、火災を絶つ役割について記されている。これはハノイの『乩正竈神経文』には記載されていないフエの経文の特徴である。フィン・ディン・ケットはオンタオを大事にする理由について、火が人々や家庭に物質的・精神的な幸せと安定をもたらしたためであろうと記している (Huỳnh Đình Kết 1998: 32-33)。また、フエ遺跡保存センターのヴィン・カオ (Vinh Cao) 氏は、オンタオの始まりは火神であると述べている<sup>50</sup>。

中村喬は中国竈神について、カマドの火と火一般は区別して考えるべきとして、火神と竈神の同一視を否定している (中村 1988: 256-257)。ベトナムでも北部や南部地域の聞き取りでは、オンタオと火神は異なる神であり、火神は少数民族の祀る神だと答えている。しかしフエ地域においては、上記のように地誌や經典のなかでも、また人々の意識としてもオンタオと火神は密接に関わっている。火災に対する人々の恐れが火とオンタオとを結びつけ、火災への回避をオンタオに祈願してきたと考えられる。

### おわりに

本稿では、文献調査とベトナム各地域での現地調査に基づき、フエ地域のオンタオ儀礼を整理した。それにより、現在のフエ地域のオンタオを祀る儀礼形式が、より古いベトナムのオンタオ儀礼の形式を継承しつつ、本来の土製支脚から小型のオンタオ神像を新たに製作して祀るという独自の変化を遂げて形成されたことを明らかにした。さらに、これまでの研究ではほとんど言及されてこなかった、オンタオの両義性という課題を実証し、フエ地域のオンタオ崇拝の特徴を、歴史を視野にいれつつオンタオの両義性の特に災異神の側面から考察を試みた。

<sup>45</sup> 18 世紀後期黎朝の儒者黎貴惇 (1726-1783) が 1776 年に記した広南国の歴史・地理書。

<sup>46</sup> 「順化処二百年生聚之余、邑里相望。即癸巳年丁簿、九鼎州、八百六十二社、村坊人数共十二万六千八百五十七人。納差余錢至十五万三千六百貫、可謂盛矣。而実田、不過十五万三千一百八十二畝。豈非人多田少。昔辰同犯商販流通富春米十升為一斛、僅錢三陌、可充一人一月之食。民未汲汲置農也。今婦仁構礼、嘉定隔阻、人相以乏食為憂。」

<sup>47</sup> 阮朝国史館が編纂した漢文による官選の地誌

<sup>48</sup> 1820 年鄭懷德撰、広南朝時代から阮朝初期にかけてのコーチシナ全域 (現ベトナム南部) の地方志 (藤原利一郎 1975: 707-708)。

<sup>49</sup> 「又祀灶神、左右畫二男形、中間一女形、亦象離火二陽中以一陰爲主之義、」

<sup>50</sup> 2013 年 6 月 25 日 ヴィン・カオ氏のご教示による。



フエ地域のオンタオ崇拝の特徴は、災異神としても観念され祀られるオンタオの両義性にあった。厳しい生活環境のなかで家族の安泰を願う人々の思いが、土地や火に関する災いを神や亡者の怒りとし、家族を守る最も重要で家族に近い存在であるオンタオに保護を求め祈願した。その一方で、新生児保護の仲介役に示されるように人間の命を司る司命神としてのオンタオと、約束に背くと祟るといふ災いとが結びついていったのではないか。おそらく、オンタオの両義性はベトナム全土に渡り存在する、または存在していただろう。しかし、フエ地域においては、フエのもつ歴史や現在においても厳しい生活環境のもとで暮らす多くの人々によって、今もなお「災異神としてのオンタオ」を正しく祀り儀礼をおこなうことでオンタオからの守護を求めている。そのことが、神像の形態を変化させながらもより古いベトナムのオンタオ儀礼を継承させてきた理由のひとつであろうと考える。

今後の課題としては、フエ地域がより古い儀礼の形式を継承している理由を阮王朝との関わりからみていく必要がある。また、オンタオを祀ることも大きく関わる祈禱師（タイクン）への聞き取りも今後おこなっていく。多地域の事例をさらに収集しつつ、フエ王宮でのオンタオ儀礼と民間との関係や阮王朝を通して中国文化の影響が継続的に入っていたこととの関連からさらに、フエ地域のオンタオ崇拝を検討していきたい。

## 謝辞

本稿は、2013年度修士論文の一部を再構成し、加筆修正したものである。修士論文作成にあたり江上幹幸先生にはご指導・ご教示を賜りました。ベトナム調査と本稿作成にあたり以下の方々にご指導・ご助言・ご協力を賜りました。大西和彦先生（ベトナム宗教研究院）、故・西村昌也先生（元大阪大学招聘研究員）、末成道男先生（元東京大学）、樫永真佐夫先生（国立民族学博物館）、菊池誠一先生（昭和女子大学）、Nguyễn Quang Trung Tiên 先生（フエ科学大学）、Huỳnh Đình Kết 先生（フエ民間文化博物館）、Trần Đại Vinh 先生（フエ大学）、Nguyễn Văn Quảng 氏（フエ科学大学）、Phân Thị Thanh Vân 氏（古都フエ遺跡保存センター）に心より感謝申し上げます。また聞き取り調査に協力していただいたベトナムの皆様にも改めてお礼を申し上げます。

## 参考文献

梅原末次

- 1944 「安南清化省東山出土の土製支脚」『人類学雑誌』第59巻第3号 日本人類学会：75-78
- 大西和彦
- 1995 「宗教と儀礼」桜井編『もっと知りたいベトナム2版』弘文堂：219-238
- 2001 「ベトナムの独脚神信仰における山神と海神の複合」『ベトナムの社会と文化』第3号：3-48
- 2002 「ベトナムの正月行事と民間信仰」『アジア遊学』No46 勉誠出版：96-104
- 2003 「トゥアティエン・フエ省タインフォック村諸族所蔵族譜・家譜中の道教関係記事初探」『ベトナムの社会と文化』第4号：110-139
- 2012a 「広南朝中・南部を開拓した王朝③—仏教の興隆—」『Vina Boo』5月 vol.60: 14
- 2012b 「広南朝中・南部を開拓した王朝③—広南朝の仏教と広東仏教界—」『Vina Boo』6月 vol.61:18
- 2012c 「フエ地域の九天玄女信仰について」『周縁の文化交渉学シリーズ7 フエ地域の歴史と文化—周辺集落と外からの視点— 関西大学文化交渉学教育研究拠点：557-577
- 2013 「カマド神信仰に見るベトナム女性商人の活躍」『Vina Boo』2月 vol.69: 14

岡江恭史 ベトナム農業だより <http://www.ne.jp/asahi/vietnam/agriculture/index.html> 最終更新日 2007,3,3

最終閲覧日 2014,12,20

菊池誠一

2002 「第2章ホイアンの位置と歴史的環境」『ベトナム・ホイアン地域の考古学的研究』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.8 : 7-10

2010 「日本出土ベトナム陶器の生産地—フエ・フックティック窯業村の調査—」今村啓爾編『南海を巡る考古学』同成社 : 183-201

2011 「フックティック村とその歴史」『ベトナム社会主義共和国 トゥアティエン・フエ省 フックティック村集落調査報告書』奈良文化財研究所 : 5-8

菊池誠一・小野田恵

2011 「第7章フックティック村における考古学調査」『ベトナム社会主義共和国 トゥアティエン・フエ省 フックティック村集落調査報告書』奈良文化財研究所 : 136-143

グエン・ヴァン・ダン (Nguyễn Văn Đăng) (新江利彦・西村昌也訳)

2012 「1306年から1945年までにおけるトゥアティエン・フエの手工芸」『周縁の文化交渉学シリーズ7 フエ地域の歴史と文化—周辺集落と外からの視点』関西大学文化交渉学教育研究拠点 : 481-495

窪徳忠

1997 「七 中国の竈神信仰」「八 火神と竈神」『沖縄の習俗と信仰』第一書房 : 435-603

桜庭和典

1994 「竈神」野口鐵郎 他編『道教事典』平河出版社 : 343

澤田瑞徳

1982 「民間信仰と道教—昭和52年11月26日、第一回道教談話会口述」『中国の民間信仰』工作舎 : 8-12

昭和女子大学国際文化研究所紀要

1997 『ベトナム・ホイアン考古学調査報告書 昭和女子大学国際文化研究所紀要』vol.3

2002 『ベトナム・ホイアン地域の考古学的研究昭和女子大学国際文化研究所紀要』vol.8

ドー・バン (Đỗ Bang) (福田康男・西村昌也 訳)

2012 「17-19世紀フエの歴史変遷におけるティンハー港町とバオヴィン港町」『周縁の文化交渉学シリーズ7 フエ地域の歴史と文化—周辺集落と外からの視点』関西大学文化交渉学教育研究拠点 : 75-84

中村喬

1988 「十二月竈の祭」『中国の年中行事』平凡社 : 253-298

鍋田尚子

2012 「ベトナムのオンタオ (Ông Táo) (竈神) 信仰—タイビン省ミーアム集落の事例報告—」『沖縄国際大学大学院地域文化論叢』第14号 : 25-47

2014 「フエ地域のオンタオをめぐる物質文化—オンタオ神像製作と儀礼—」『東南アジア考古学会』34号 : 59-71

西野範子

2012 「ベトナムにおける考古遺跡発掘調査の活用例 : キムラン歴史陶磁器博物館の建設」『金沢大学文化資源学研究』4号 : 17-24

西村昌也

2011 『ベトナムの考古・古代学』同成社

2012a 「フエ地域研究の発想・枠組み—フエ旧外港集落フォンヴィン社と周辺域における他分野フィールド研究から—」周縁の文化交渉学シリーズ7 フエ地域の歴史と文化—周辺集落と外からの視点』関西大学文化交渉学教育研究拠点 : 3-13

2012b 「フエ研究からみたベトナム・東南アジア・東アジア研究における可能性」周縁の文化交渉学シリーズ7 フエ地域の歴史と文化—周辺集落と外からの視点』関西大学文化交渉学教育研究拠点 : 449-455

ファン・タイン・ハイ（西村昌也訳）

2012 「フエ文化と中部ベトナム文化形成過程における広南阮氏の首府」『周縁の文化交渉学シリーズ7  
フエ地域の歴史と文化-周辺集落と外からの視点』関西大学文化交渉学教育研究拠点：497-505

フィン・ディン・ケット（本多守訳）

2005 「フエの神格祭祀について」『ベトナムの社会と文化』5/6号風響社：205-217

藤原利一郎

1975 「ベトナム史料」山本達郎編『ベトナム中国関係史 曲氏の抬頭から清仏戦争まで』山川出版社：  
707-708

三尾裕子

1999 「漢民族の民間信仰－「中国的宗教」論への一視角」『中原と周辺－人類学的フィールドからの視  
点』風響社：221-239

2005 「中国民間信仰のダイナミズム－道教との関係」『民俗文化の再生と創造 東アジアの沿岸地域  
の人類学的研究』風響社：213-241

Alexandre De Rhodes

1965 *Dictionarium Annamiticum-Lusitanum-Latinum*, Roma Thanh Lăng, Hoàng Xuân Việt, Đỗ Quang Chính

1991 Từ điển Annam-Lusitan-Latinh (thường gọi từ điển Việt -Bồ-La), Nxb Khoa học xã hội

Bento Thiện

1659 “Lịch sử Nước Annam” Đỗ Quang Chính, Sj 2008 (1972) *Lịch Sử Chử Quốc Ngữ 1620-1659*, Nxb Tôn  
Giao :176

Do Lam Chi Lan

1998 *La mere et l'enfant dans le Viet-Nam d'autrefois*, L'Harmattan, Paris-Montresal :190

Đỗ Quang Chính, Sj

2008 (1972) *Lịch Sử Chử Quốc Ngữ 1620-1659*, NXB Tôn Giao

Huỳnh Đình Kết

1998 *Tục Thờ Thần ở Huế*, Nxb Thuận Hóa, Huế

2001 *Tranh Làng Sinh Trong Đời Sống Tín Ngưỡng Dân Gian Huế*, Nxb Huế

Huỳnh Ngọc Trảng, Trương Ngọc Tường, Hồ Tường

1993 *Đình Nam Bộ, tín ngưỡng và nghi lễ*, Nxb Thành phố Hồ Chí Minh.

1994 *Văn hóa dân gian cổ truyền Ông Địa tín ngưỡng và tranh tượng* Nxb Thành phố Hồ Chí Minh.

Huỳnh Ngọc Trảng, Nguyễn Đại Phúc

2013 “Chương II :Táo Quân- Nhất Gia Chi Chủ” *Đặc khảo về tín ngưỡng thờ gia thần*, Nxb Văn hóa văn nghệ:  
35-56

Lê Trung Vũ

2003 *Tết cổ truyền của người Việt*, Nxb Văn Hóa-Thông Tin

Mai Viên Đoàn Triển

2008 (1906) *An Nam Phong Tục Sách* 安南風俗冊, Nxb Hà Nội

Nguyễn Đồng Chi

1974 *Kho Tang Truyen Co Tich Viet Nam Tap1*, Nxb Khoa Hoc Xã Hội Hà Nội

Phan Kế Bính

2011 (1915) *Việt Nam Phong Tục*, Nxb Văn Học

Toan Ảnh

1997 (1967) *Nếp cũ Tín ngưỡng Việt Nam*, Nxb Thành phố Hồ Chí Minh

2000 *Phong Tục Thờ Cúng Tổ Tiên Trong Gia Đình Việt Nam* Nxb Văn Hóa Dân Tộc

Trần Đại Vinh

1995 *Tín Ngưỡng Dân Gian Huế*, Nxb Thuận Hóa, Huế

Trần Ngọc Thêm

1999 *Cơ Sở Văn Hóa Việt Nam*, Nxb Giáo Dục

Trần Thị Lệ Xuân

2010 “BÈP XƯA TRONG DI TÍCH Ở KHU PHỒ CỔ HỘI AN” *Bản Tin của Trung tâm QLBT Di tích*, Nxb Trung tâm QLBT Di tích Hội An

Tavernier, Jean Baptiste (Lê Tư Lành 訳)

2011 (1681) “Chương XV Tôn giáo và những tục mê tín dị đoan của người dân Đàng Ngoài”, *Tập Du Ký Mới Và Kỳ Thù Về Vuiwbg Quốc Đàng Ngoài*, Nxb Thế giới

『烏州近録』楊文安、莫朝景曆6年(1553)、漢喃研究院、Nxb Khoa Học xã hội, Hà Nội 1997

『越南開國志伝』卷1、阮科占、永盛15年(1719)、『第四冊越南漢文小説叢刊』台湾學生書局、台北、1986年

『嘉定通志』卷3、鄭懷徳、明命元年(1820)

『灶君經』維新3年(1909)

『乩正竈神經文』河内劍湖玉山祠藏版、成泰18年(1906)

『大南一統志』卷1、卷9. 阮朝官撰、嗣徳35年(1882)

「太上靈寶補謝竈王經 五經同卷」「洞玄部 本文類 乃下」『道藏』上海涵芬樓影印

「東厨司命燈儀 二燈儀同卷」「洞真部 威儀類 爲上」『道藏』上海涵芬樓影印

『撫辺雜録』卷3、黎貴惇、Phủ quốc-vụ-khanh Đắc-tránh Văn hóa xuất bản 1972, Tủ sách cổ văn Ủy ban dịch thuật